

リチャード・セラの初期作品(1968-1971)におけるドキュメンテーションの位置づけとその政治的背景

高橋 沙也葉(京都大学)

戦後アメリカの彫刻家リチャード・セラ(Richard Serra, 1938-)は、ゴムや液状の鉛などの素材を用いた、一過性によって特徴付けられる彫刻を展覧会場で制作する動向、ポストミニマリズムを代表する作家として、1960年代末に若くしてその名を知らしめた。当時期のセラの実践をはじめとする60年代末以降のアメリカ彫刻の展開は、これまで作家自身や美術批評家の言説に基づく分析により、因習的な彫刻概念に挑戦するその企図から語られる傾向にあった。一方で、その彫刻実践の成立と展開の背景にあったネットワークや、作品と美術市場・制度および時代状況との相互作用については、未だ十分に論じられていないように思われる。

「芸術の脱物質化(L.R. リバード)」に向かった60年代末の作品群の成立と展開を論じる際に、それらが文書・ドローイング・写真・映像などを介して再び物質化され、美術市場・制度の中に位置付けられてきたという経緯を無視することはできない。本発表の目的は、作品に一過性やサイト・スペシフィック性を導入した最初期の実践である60年代末の彫刻と、複製可能な表象を作り出すドキュメンテーションのあいだの関係性を明らかにすることである。具体的には、60年代末のアメリカの彫刻実践を牽引したセラの初期作品(1968-1971)に着目し、その新たな彫刻においてドキュメンテーションがいかなる役割を果たしたかを検証することで、市場原理に根付いたアートシーンで「芸術の脱物質化」へと向かった作家の葛藤の一端を描き出すことを試みる。

まず、セラが68年12月に「レオ・キャストリの九人」展(キャストリ・ウェアハウス)で発表した作品《まき散らし》(1968)とそのドキュメンテーションに着目し、セラの初期作品において写真が単なる記録以上の役割を担い、国内外での受容を形作ったことを指摘する。とりわけ当時期のドキュメンテーションにおける作家の身体の前景化について、50年前後に抽象表現主義に関わった作家の表象とも比較しながら、その特徴の考察を行う。続いて、当時期のセラをよく知る人物らの証言とも照らし合わせながら、カール・アンドレ(Carl Andre, 1935-)との合作で写真を作品の不可分な構成要素として据えた《豚はその子供を喰ってしまうだろう》(1970)と、「アート・アンド・テクノロジー・プログラム」におけるセラの制作(1969-1971)を中心に上げる。そして、政治活動家アビー・ホフマン(Abbie Hoffman, 1936-1989)による活動をはじめとする、60年代末のアメリカの若者のあいだで見られた反体制運動への共鳴の

中で、セラがテキストや写真といったメディア全般の効果により自覚的になって作品制作に取り組んでいった過程を指摘する。

彫刻とドキュメンテーションの相互作用をめぐる上記の分析を通して、セラがその後の彫刻実践で行った空間的な鑑賞体験の追求が、作家の美学的関心のみならず、当時期の政治意識およびメディアに対する意識の変化に支えられていたことを明らかにしたい。